静かなひとへや

郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
静かなひとへや

【Ｎコード】
Ｎ３９０３Ｄ

【作者名】
郎

【あらすじ】
私は、ヘッドフォンをしたままで生活を送ることとした。学校もやめ、働きもせず、雑音とともに安らかな生活を送ることにしたのだ。けれどある日、私はある生き物を拾ってしまった。可愛らしい小さな生き物と、可愛らしくない大きな生き物とを。

1. 私のせいかつ

口が寂しい、と言う人がいる。手が寂しい、と言う人もいる。
そういった人達は、口へと何かを入れてみたり、手に何かを持ってみたりするんだろう。
私は、耳が寂しいと言う人だ。
だから、耳に何かを聞かせてやろうと思い立った。
朝起きて、最初にする事はヘッドフォンを着ける事。それを習慣にしてしまうのだと。
朝、起きて。夜、寝る。
その間、私がヘッドフォンを外す事は無くなっていった。
外してしまう事が嫌で、風呂にあまり入らなくなった。
同じ理由で、学校へも行かなくなる。
そういった生活を始めると、色々な人達が私を訪ねにやってくる様になった。
学校の先生だとか、友達だとか、親戚だとか家族だとか。
その人達は、皆私に話し掛けてきているように見えた。
私はその間、雑音ばかり聴いていて。
何を言っていたのか（勿論、本当に話し掛けてきていたのかも）、まるでわからなかったけれど。
私から、無理に音を取り上げようとする失礼な人もいた。
そして信じられないことに、抵抗する私の事をぶつ人まで。
勿論、殴り返した。渾身の力で追い出した。
そんな事を繰り返しているうちに、誰も私を訪ねてこない様になっていった。
もう誰も訪ねてはこないのだと気付いて、私は心底安堵する。
これでやっと、幸せな生活を過ごせるのだと。

私は仕事を探し始めた。親からの仕送りが途絶えてしまったのだ。

一緒に入っていた手紙から察するに、帰って来いという事らしい。
まっぴらごめんだった。
だから私は、ヘッドフォンをしたままの子供にも出来る様な、そんな仕事は無いかと探し始めた。
まずは、内職という奴を始めてみた。家の中で作業をするのだから、ヘッドフォンをしていようが関係が無いだろうと。
・・・三日で、飽きてしまった。
それでも一応、貰った分だけはやりきり、家賃代にもならない程度の金を貰った。
しかし、それでも収入は収入。ありがたかった。親からの仕送りも途絶え、内職すらも辞めてしまい、それでも、一ヶ月ほどは何とかなった。
水とパンと、ヘッドフォンとその音源。私の生活に入り用なのは、たったのそれだけだったからだ。
暗くなれば眠り、寒ければ厚着をし、少しだけ節約を意識する。
携帯電話も解約をした。と言っても、これは節約のためではなくて、携帯自体が煩わしくての事だ。節約生活（？）に不便は無い。心底安らいだし、何より楽だ。
だけどいくら節約をしたところで、金が減るのは止められなかった。
嘆かわしい。
しかたない。私は持ち物を売る事にした。無駄に数がある衣類、場所を取るだけの家具達。いらない物はいくらでもある。
唐突に話が飛ぶけれど、私はとある生き物を拾った。
タダ飯を食わせるつもりはさらさらないので、そこは自力で何とかしてもらうつもりだ。住居を提供してやっているのだ。それ以上世話をやく必要もないだろう。
たまたまに見つけ、有無を言わさず連れ去ってきた生き物。
飼い方は知らないし、何と言うのかも知らない。けれど、連れ去って欲しそうだったので連れ去ってきてしまった。
…どうしよう。

私は一瞬だけ考え、そしてすぐにそうする事を放棄した。
眠気が襲って来たのだ。あらがうなんて、そんな馬鹿な事はしない。
私は、戸惑っている生き物を放置し、そのまま眠りに着く。
視界の端に、拾ってきた生き物達が一瞬、写る。
愛らしい小さな生き物と、醜悪な大きな生き物が。

1．私のせいかつ（後書き）

ヘッドフォンしてる少年少女っていいよなぁ、っていう事で書き始めたはずだったのにいつのまにかこんなことに。
何か書けそうな気がしてきたので連載にしますね。
そんなに長くしないで一桁代で終らせるつもりです、よければお付き合いを。
一応路線はライトノベル。誰がなんといおうとも。
・・・ヘッドフォン付き少年少女に萌える方とかいませんかね・・

2．小さないきもの

目覚めると、眼前に他者の顔があった。
反射的に手が出、それを渾身の力で殴り付ける。倒れ、悶絶するその生き物。
その姿を見た事で、私は思い出す。そういえば、昨日これを拾ったのだったと。殴ってしまった、それを確認する。あぁ、これは小さな方だだ。か弱そうな様をしているというのに、かわいそうな事をしてしまった。おまけに鼻血をだしている、ううん、反省でもしようか。
私は念入りにヘッドフォンを付けた。この部屋に他者がいると言う事は、私の望まない音が、耳に届いてしまうかもしれないと言う事だろうと考えて。
テーブルの上の袋から、一枚の食パンを取り出し、口に含む。少し乾燥している様で、旨い言いがたい味だった。
布団に包まりながら、いつも通りに食事を終える。その間中、視線が突き刺さってはいたけれど。いつも通りはいつも通りだ。私が、そう思っているのだからそうなのだ。
視線を返してみると、目を逸らされる。警戒でもされているのだろうか。
私が視線を外すと、視線は私の方へと戻ってくる。それに気付いた私が視線を返せば、また目を逸らしていく。よほど、私と目を合わせたくないらしい。嫌われるようなことでもしたのだろうか。心当たりは、ある様な無い様な、微妙なところだ。
尿意を感じ、むくりと起き上がる。小さな生き物が、震えたのが目に入る。けれど、構うつもりは無い。すみやかに用を足した。
部屋へ戻ると、まっさきに小さな生き物が視界に入った。何と言う事か。私の貴重な食糧を貪っている。

とりあえず、生き物を食糧から引きはがす。ついでに、軽く殴ってもおく。なにせまだ小さいのだ。躾は必要だろう。
あぁ、六枚も入っていたというのに。もう、四枚まで減ってしまった。小さなナリをして、大食いな奴だ。私ならば、一枚を三度に分け食べるのに。
小さな生き物は、部屋の隅で挙動不振にしている。注意の声を出そうと息を吸い込み、そして気が付いた。声を出す事は、久しくしていなかったのだったと。仮に、声を出していたところで、それは私に聞こえていはしないのだ。
「……。」
声の出し方は、これでよかったのだったろうか。小さな生き物の反応からでは、わかる事ができなかった。
どうするべきかと、一瞬だけ悩む。
書いてつたえよう。
それが頭に浮かぶまでに、しばらくの時間がかかった。ばからしい。他に何があったというのか。
近くにあったボールペンを手にとり、机に殴り書く。

「たべものはたべるな　みずはのむな　でんきはつかうな」

ボールペンを適当な所へとなげとばし、書いた言葉を生き物へと見せた。不安げな顔をされる。

「じぶんでかってになんとかしろ」

つけたした言葉は、そんなふうだった。この生き物にまで金をかけたりしてしまえば、私のほうが飢え死にしてしまいそうだ。
生き物が飢え死にするのは構わないけれど、私が飢え死にするのであれば大いに構う。大いに困る。
あぁ、けれど死体はできれば見たくない。そうなる前には追い出そ

うか。
考える事にすら気だるさを感じ、布団に包まった。今や此処で無ければ、私は物事を考えられないも同然になってしまっているのだ。たまに思考が強制終了されてしまうのが、問題ではあるけれど。どうしたものか、緩く頭を働かせた。気晴らしに、寝返り等も打ってみる。
左手が、生暖かい物にあたった。妙に軟らかい、不快な感触。
「……。」起き上がるのが、億劫だった。
このまま放置しておこうか。放り出してしまおうか。私は頭を動かした。そこにいるであろう生き物を、視界におさめるべくにして。小さな生き物はそこにいた。今は私から目線を外す事もなく、ただひたすらに、気持ちがよさそうに眠っていた。
随分と気持ちがよさそうで、うらやましく、妬ましく、そして多いに気に入らない。
ああ、畜生、負けるものか。私だって、もっと気持ちがよくなれるのだ。負けるものか、と。私は気張り、眠りにつく。悔しい事に、あまり、気持ちがよくはなかったけれど。

2．小さないきもの（後書き）

２／２９に細部修正。何か色々と酷すぎやしいかと我ながら思ったため。
だけど大して改善してない…また後でやりますね。

3．大きないきもの

頭がぼんやりとしていた。気分も、決して良くなどはない。なかなかに、嫌な目覚めだ。
薄く、眼を開いた。
ぼやけて、部屋の情景がうつる。動いている、ふたつの影。一つは小さく、もう一つはやけに大きい。
大きい方の影が、小さい方の影を包み込んでいた。話をしてでもいるのだろうか。
視界がはっきりとしていく。小さい影は小さな生き物へ、大きい影は大きな生き物へと成りかわる。
小さな生き物が、赤らんだ顔で楽しそうにしゃべっている。大きな生き物は、それにただただ頷いていた。
大きな生き物は、くたびれているふうだった。けれどそれは、小さな生き物のせいではない。むしろ癒されているようである事が、一目でわかる。
そのままに見ていると、やがて、大きないきものがふらりと立ち上がった。何処に行くという事もなく、小さな歩幅のものをひっつけ、怪しくただ歩きまわる。
嬉しそうな顔をしていた。小さな方も、大きな方も。
それは何やら気持ちが悪くて、そのくせ、妙に私の気を引いていた。楽しそうに楽しそうに、私の部屋をくるくると歩き廻る、大きいものと小さいもの。その光景を、私は見ていた。
意識はもう、はっきりとはしていたのだけれど。起き上がらずに、ただ見ていた。
ここは私の部屋だというのに。他の処ならばともかく、ここは私の部屋だというのに。どことなく、そうではないかのように思えた。
起きたくなかった。大きないきものか小さな生き物か、どちらかがいなくなるまでは寝ていたかった。

だけれど、私はそれを見ていた。何か考えるでもなく、行動を起こすでもなく、眠っているふりをしながら。生き物達は、廻っていた。くるくるくるくるくるくると、部屋の中を徘徊した。
二匹は、笑っていた。しあわせそうに、歩いていた。ここは、私の部屋だというのに。私が、生活している場所だというのに。私の所だというのに。布団の中に、顔が埋まるまでに潜り込んだ。生き物達にばれないようにと、静かに、こそこそとして布団をひいた。その事が、堪らなく悔しかった。
やがて、歩き回る、その気配がなくなった。しばらくの間待ってみても、それは戻らない。
こそりと布団から顔を出して、部屋の中をみまわしてみた。小さな生き物は、玄関にいた。けれど、大きな生き物の姿が見当たらない。そういえば、私が眠る前までもいなかった。何処へ行ったというのだろう。
私はのそりと起き上がり、玄関へと歩いた。驚いた顔をして、小さいのが私を見る。ちらりと見返すと、また目を逸らす。相変わらずだ。
玄関のドアが開いている。私が鍵を開けたはずはないのに。ドアから顔を出した。大きな生き物がそこにいて、瞬間的に目が合った。大きな生き物は、驚いていた。小さな生き物よりも、少しばかり多く。
しばらく、私も大きい生き物も、そのまま固まっていた。
大きな生き物が、軽く頭を垂れた。お辞儀か何かのつもりだろうか。そのまま歩き始める生き物は、時々こちらを振り返っていた。
乱雑にドアをしめる。
釈然としないまま顔をそらせば、其処で小さな生き物が、真直ぐにして此方を見ていた。

4．可かしなひととき

小さな生き物は、私から目を逸らさなかった。何という、珍しいことだろう。
そのままで、長いこと見つめてみた。それでも目を逸らしはしない。
少し感心するのと共に、私は少しだけおかしく思った。
何故、この生き物は今に限って目をはなさないのだろう。特に、これといってきっかけらしき事もなかったはずだ。
一応考えてはみたのだけれど、理由はわかりそうにもなかった。ただの気まぐれか何かなのだろうと自己完結させ、部屋の奥へと戻る。
流石にもう、寝る気はおきない。私は、愛用しているクッションの上に腰を下ろした。
小さな生き物は、まだ私をみている。
視線を送り返してみる。生き物は、特に変化をしめしはしない。
不思議にはおもった。けれど、それで何か害があるというわけではないのだ。私は、小さな生き物の事は放って置くこととした。
いつも通りに、音だけを垂れ流しながら生活した。いつも通りにくつろぎ、いつも通りに食事をした。
食事の時には、また私の物を食らう気ではないのかと気を張りもした。けれど、大きな生き物から与えられでもしたのだろうか。小さな生き物は、私の近くで、私の買った覚えのない物を貪っていた。
おまけにそれは、私の食べ物よりもはるかに食欲をそそる物であるように見えたのだ。その事が少し気にくわず、ところとごろで邪魔を仕掛ける。大人げがないのは、一応、承知の上の事のつもりだ。
しかし奇妙な事に、小さな生き物はそれをも喜んでいるように見えた。
もしかすると、そういった性癖でもあるのだろうか？
私がぼぉとしている時、小さな生き物はずっと私に纏わり付いていた。本当に、昨日とはえらく違う行動をとる奴だ。

ひたすらに口を動かし続け、時折、私が表情を変えればはしゃいだ。もちろん、小さな生き物とは関係がない事で、私の表情は動いたのだか。日が、落ちている事に気が付いた。何時頃になったのだろうか。と、とうの昔に売り払っている時計を探した。時計などあるはずがないと気が付いたのは、何度か視線が部屋中巡回してからの事だった。

小さな生き物は、まだ私の側にいる。

そして変わらず、疲れるだろうに口を動かす。いい加減、私に意思が伝わっていないと、気が付いてもよさそうだけれど。

小さな生き物の、生暖かい体温が欝陶しい。けだるさを感じながら、無駄だと知りつつ振り払う。けれど、感触がない。そう気付くと同時に、欝陶しい体温が離れた。

避けたのだろうか。怪訝に思い、顔を上げる。

私の側に、小さな生き物はいなかった。顔を赤くほてらせて、玄関へと駆けている。

大きな生き物がいた。

慎重に、丁寧に、恐る恐ると小さな生き物を撫でているその生き物は、片手にこじんまりとしたダンボールを抱えていた。私の姿を見ると、目も合わせぬまま頭をたれる。そして怖ず怖ずとすまなさそうに、私にそれを差し出した。

なんのつもりだ。

私の考えている事が顔に出でもしたのかどうなのか、大きな生き物は、滑稽なほどに必死の形相になり、そのままの状態でジェスチャーを始めた。一応、私に喋りかけても無駄だと察してはいるらしい。

大きな生き物の手は、箱の真上で秩序なく動き回っていた。ダンボール箱を開けろ、という仕種だろうか。

意図を掴みきる事はできないまま、ダンボールを奪い取る。

嬉しそうな顔。

私の推測は当たっていたようだった。大きな生き物に、安堵の表情が浮かぶ。

ハサミなどありはしないのだ。私は力ずくにテープをはがし、剥がれたものはそこらに投げた。
邪魔な物達を剥がしきり、箱の中を確かめる。
黒い箱があった。人の頭が二つ三つ入りそうな、丸みをおびた黒い箱。
私が不覚にも驚いていると、小さな生き物がよってきた。
随分と輝いた眼をしていて、黒い箱を見てはしゃいでいる。
邪魔だったのでそれを押しのけ、段ボール箱から黒い箱を取り出した。それについで、細々とした物達もが沸いて出る。
欝陶しい。
こんなものを、自分でどうにかしようだなど、思えるはずがない。
もとはと言えば、大きな生き物が持ってきた物だ。
一式を押し付けた。自分で、どうとでもするがいい。
大きな生き物は、一瞬、驚いたようだったが。けれど、すぐにそれの設置に取り掛かった。小さな生き物が、その近くをうろちょろとしている。しばらくたつと、設置が終わったのか、両手を上げて喜んでいた。
流石に気になったので様子を見に行き、しげしげと眺める。
スイッチを押せば、画面が光り。テレビなどを久々に見れた。
大喜びの生き物達が、目の端に写る。よっぽどにこれが嬉しいらしい。
死んでもいいと言わんばかりの喜びようを眺めながら、電気代はどうしようか、と。そんな心配を、ぼんやりとした。

4．可かしなひととき（後書き）

…やたら遅くなってしまいましたが、四話目ようやく完成しました。次回辺りからは話し進む予定です、あくまで予定ですが。一応プロットじみたものはあるので。こんなのにも（笑）

受験がおわったら、俺、小説書くんだ…（

5．見ぐるしいかお

電気代の事について尋ねようかと、ペンを持って近付いて行く。
大きなその肩を叩き、顔を向けさせる。ペンのキャップを外そうとすれば、大きな生き物から、ずっしりと重い、黒ずんだ財布を手渡された。
あまりにも唐突な事だったので、まぬけな顔を晒してしまう。大きな生き物は、曖昧な笑顔を浮かべていて、もう一度財布を強く押し付けてきた。
使え、という事なのだろうか。だとすれば、相当太っ腹な事だ。金銭感覚が狂っているとしか思えない。
しかし、確認をして、もし取り上げられたりしてはたまったものでない。太っ腹であろうがなかろうが、有り難い。ありがたく生活費にあてさせてもらおう。
私がしかと受け取ったのを確認すれば、大きな生き物は安心したように控えめに笑う。そしてすぐに視線を外し、小さな生き物の下へと戻っていった。
おかしな奴だ、と、鼻先で軽く嘲笑ってみる。自分の鼻息が髪を揺らし、少し不愉快な状態になった。
財布の中身を確認すれば、そこには非現実的な厚さで、札がこれでもかという程に詰まっていて。
意図せずにして、生唾を飲み込んだ。
なんせ通常ならば、到底目に出来ないであろう額なのだ。ああ、この程度の驚きしか出来ず失礼な事を。
考えている事も定まらぬまま、これの元の持ち主を凝視した。
返すつもりなど、毛頭ない。けれど、あまりに不可解過ぎた。理由ぐらい、知ろうと思わずにはいられまい。大きな生き物は私の目線に気付いてないのか、はたまた無視を決め込んでいるのか。小さな生き物と、いっそ不気味なほど無邪気に戯れていた。

私は動かず、見つめたままでいる。ふと、小さな生き物が私を見た。小さな双眸を、不思議そうに丸く広げる。しばらく、眼を丸めたまま固まり、大きな生き物を翻弄とさせていた。
フローリングを、裸足でける。小さな生き物が、私の方へと駆けて来る。
大きな生き物は、ようやく私の方を見た。私が送っていた視線にもようやく気がつき、目んたまを不安げに動かした。
軽い衝撃と、生温い体温を感じながら、私は目線を送り続けた。そして札束をおもむろに見せつけ、それで小さな生き物の頬をはたく。するとそいつは突然に慌てふためき、千鳥足になる。酔っ払ってもいないくせに、おかしなことだ。
そいつは、私の方を見れば泣きそうな顔になった。しかし、何と言う被虐心のそそられない泣き顔だ。これと同じ顔を、小さな生き物にでもさせれば、それはそれは、ひどく弄りたくなる物になるのだろうに。
財布の理由を、例によって文字で尋ねた。窓が都合よく曇っていて、今回は机を汚さずにすむ。
大きな生き物が文字を見れば、途端に似合わない笑顔が浮かぶ。随分とにこやかな、けれど見苦しい顔で、改めて財布を押し付けてきた。
何だ、これは。
私は、突然に押し付けられた理由を聞いていたというのに。それに対して、もう一度押し付けるとは、一体全体どういったつもりだ。
大きな生き物は、見苦しい笑みを顔に貼り付けている。その顔を見て、その顔から繋がる、無骨な毛深い掌を見て、そこに持たれた財布を見て、私はそれを不愉快に感じた。
押し付けられるそれらを、無理に強く跳ねのけた。大きな生き物の顔から、見苦しい笑顔がはがれかける。かわりに、形容しがたい顔へとかわる。いつだかテレビで見た事がある、ムンクの叫びの表情に似ていた。けれど、それとも少し違っている。何にせよ、見苦し

い事は変わらなかった。
跳ねのけた腕から遠ざかるようにして後ずさり、落ちていた財布だけを拾った。いくら持ち主が不愉快であろうと、金に罪があるわけではないのだ。金は不愉快ではない。けれど、財布は不快だった。持ち主の匂いが、沁みこんでいる感じがした。
中の札束をぬきとり、固まっている大きな生き物へ、空になった財布を投げた。投げつけた、といった表現の方が正しいだろうか。
大きな生き物が、小さく横に揺れる。大きな生き物のたるんだ頬に、黒ずんだそれがあたったのだ。財布が落ちて、そいつの足にあたり、はねた。
大きな生き物は動かない。微動だにせずにそのままにいる。
突然、生ぬるい体温が私から離れた。
私から離れたそれは、動かないものへと近づいていった。そしてすぐそばにまでよると、せいいっぱいに背をのばした。自らの手を、大きな生き物の頭へと置き、ゆるやかに動かして。
それは、奇妙で奇抜で、どうにも可笑しな図柄だった。
ずんぐりと大きな、見苦しい生き物が、か細く幼い、かわいげのある生き物に撫でられる。
小さな生き物が、震えるほどに背伸びをしているというのに、大きな生き物は、身をかがめる事もしない。無駄に大きなその背のままで突っ立っていて、小さな生き物の手のぬくもりを、放心したようにうけていた。
大きな生き物は、嗚咽をはじめた。
声など聞こえるはずもないのだから、本当に嗚咽したのかどうかはさだかではない。
けれど、大きな生き物は泣いていたのだ。おまけに、口をみっともなしに大きく開けて。鼻水が汚らしく顔に滴り、鼻は赤らんでいく。大きな生き物はくずれおちた。小さな生き物の胸元に縋り、小さな生き物で鼻水をふいた。小さな生き物は、大きな生き物から逃げることはしなかった。小さな生き物は、そのまま変わらず撫で続けた。

大きな生き物が、一体何をしているのかという事すらもわからぬように、眉一つ動かさず撫で続けた。
そして、その光景を、私は見る。私はこの光景を見ていた。この光景が、私は好きなのかもしれなかった。私がこの生き物たちを拾ってきてから、ようやく初めて、私にとって、この生き物たちが疎ましくなくなる。気付かずに、私はふらふらと生き物たちに近寄っていた。
絵などに興味はないのだけれど、こんな絵があるのならばほしいと思う。
大きな生き物が泣き崩れ、小さな生き物がそれを撫で、私がそれを眺めている。その間ずっと、テレビの画面は光っていた。

5．見ぐるしいかお（後書き）

またも遅くなりましたが、五話完成しました。
今回は自分にしてはやや長めに。だけど相変わらず話し進まないっていう…。いい加減進めるつもりだったんだけどなぁ。
そして特に意識していないと「～の音がした」とか書いてたりしてちょっとやばいです。
次回辺りでヘッドフォン云々もっかい書いて、設定ちゃんと自覚しよう…。
そしてアクセス解析みると二話だけやたらアクセス多いのは何でだろう。一話より多いって一体…。

6．見おぼえのある

テレビが、煌々と騒がしく光る。電波がうまく届かないのか、時折画面が不規則にゆれる。
大きな生き物は、あいも変わらず小さな生き物に縋り続けた。それを甘やかし、撫でている手もかわらない。
私の持つ意識だけが、覚めていく。
気持ちが悪いな、と、驚くほどにあっさりと思った。先程までの感慨は、何処へさってしまったのか。
私は冷めた気持ちで光景を眺めていた。そしてこれ以上、気持ちが悪くなりたくなくて眼をそらした。一瞬であっても、この光景が好きだと感じたのは事実のはずだ。その時の私を、汚してはいけまい。眼をそらした先には何も無かった。テレビがあるのは、生き物二人がいる近くで。私の部屋には、その生き物とテレビしかない。
薄く黄ばんだ、白い壁だけが私の視覚を支配する。
ところどころ、家具が置いてあったところだけが真っ白のままで、少し眩しい。
目線をそらし続けたままで、私は嗚咽がおわるのを待った。慰めが終わることを待った。声が届かないのだから、音が聞こえないのだから、終ったかどうかも、すぐには知る事もできないだろうが。
立ったままでいるので、脚に痺れがくる。最近はろくに歩いてすらいないので、少しばかりきつく感じた。
このままでいるのも、辛すぎる。私は痺れる脚を無理にたたみ、よりかかる物のない場所に一人座り込んだ。じわじわと、脚の痺れが痛みにかわる。いたい、と、他人事のように思った。
生き物たちに背を向け、一人淋しく部屋の隅に座っている。この状況に、少しばかりの苛立ちを感じた。
ああ、ここは私の部屋だというのにな。
唇を甘く噛んだ。先程までの感慨は、本当に何処へ消えたのだろう。

気が付いてみればみっともなしに、貧乏ゆすりなどもしていた。指が落ち着きなく、リズムをとって上下に動く。
もう生き物達は復活しているのだろうか。いつも通り、訳のわからない行動をとっているのだろうか。
たかだか数日で、いつも通りも何もあったものではないというような気もするが。背後を、ちらりとでもうかがってみようか。けれど、まだやっているようであれば、ちらりとでも見ていたくはない。やはり、やめておこう。あと少しだけ、あと少しだけたってからにしておこう。
何一つとして、やる事も見る物も存在しない。数日ぶりに、ヘッドフォンから流れる音に耳を澄ました。
相変わらずの、秩序のない乱れた音だ。だけれど、それが心地よかった。
そうだ、私も嗚咽してやろうか、と。そんな事を唐突に思う。
うめき声を出してみようと、あてずっぽうに咽を震わす。だけれど、それが嗚咽となっているのかどうか、私が確認する事は出来なかった。考えてみれば、当たり前の事だ。けれど、私はそれを悔しいと感じた。
鼻水などが出るはずもないし、涙などは尚更だ。私には、もう嗚咽できる方法が無かった。
悔しい。
悔しいと、口の内で呟いた。私にはもちろん聞こえないが、これならば、この大きさならば、生き物達にだって聞こえはしない。
それだけの事で、勝ち誇れる。
だけれど、その事がまた、酷く悔しかった。
私はもう、何もしなかった。耳へと流れる雑音さえも、意識の中にはいれなかった。
ぼんやりと、壁を視界に入れて、けれど眼には写さずに、座ったままでそこにいた。
次第に、うっすらと眠気が襲ってくるようになる。

ああ、もういいや。抵抗するのも、面倒くさい。
私は、眠気にそのまま身を任せた。

気が付けば、部屋の中は真っ暗だった。覚めきらない意識を引きずり、手探りで電気の紐を手繰り寄せる。
小玉の明かりだけを付け、目を擦る。眩しいとは思わないが、夜目がきかず、視界は不十分なままだった。
横を見れば、生き物達がいた。呆れた事に、私が最後に見た格好のままだ。泣き疲れて、眠ったのだろうか。まるで子供だ、と一人嘲う。部屋の隅にある我が寝床は、包装紙などを被り荒れていた。それのすぐ側のテレビが憎らしく、壊れない程度に画面を蹴飛ばす。
テレビは少しばかり傾いて、けれど倒れず地に足をつけた。それが何やら面白くなく、もう一度だけ軽く蹴飛ばした。
指先がちょうどスイッチを押したようで、カチリと音がし、その空間が明るくなる。突然の光に、おもわずしばし目をつむった。
写っているのは、ニュース番組であるようだった。不細工なおばさんが、マイクを向けられ泣いている。表示されている字幕を見れば、相当に酷な事を聞かれているのだとわかる。そうっとしておいてやれ、と思うのは、この手の番組においては常だ。
消して寝ようと身をかがめれば、番組の画面がきりかわる。映し出されたのは、話題の中心にいる者達の写真。
ボタンへと伸びていた片腕が、思わずとまる。
そこに映し出された顔が、どちらかというと、やや、少々、それなりに。見知ったもので、あったからだ。
私の部屋の中で眠る、あの生き物達に眼を向けた。見間違いではないだろう。ここに写っているこれらは、この部屋で眠るあれらなのだ。

6．見おぼえのある（後書き）

やっと話しが進められそうで安心してます。
春休み中にもう一話ぐらいは…と思ってますので、期待しないで待っていてくださると幸いです（

7．脳をうごかす

気がつけば、テレビの前に座り込んでいた。アナウンサーが喋るばかりで、なかなか字幕が出てこない。不親切な番組だ、私のことなど考えてもいない。

くいいるようにして見つめていても、もう、生き物達の写真も話題もでてきはしない。

何かの間違いだったのだろうか、とも思ったけれど、私は眠らずにそこにいた。テレビの画面が、不規則にゆれる灰色になる。それでもまだ、私はそこに座っていた。

砂嵐が映る画面は、騒々しくて少し苛立つ。寝不足が理由か、苛立ちが理由か。頭が痛むのを感じながら、砂嵐から目を反らした。理由もわからず、苛立ちを感じる。

手元の物を、確認もせずに掴み上げた。乱暴に、力の限りに壁に投げる。それは数日前に食べたパンの袋で、力無くぶつかりへなへなと落ちる。

もちろん、そんな事をしたからと言って苛立ちが消えるはずもない。かえって、私は苛立つ事となってしまった。

ああ、もう。

寝起きからして最悪な事だ。二度寝をしようにも、眠気がやってきていない。形ばかりのあくびをし、その虚しさにまた苛立つ。

でたらめにチャンネルを変え続けて、番組を放送しているところを探し続けた。けれどろくなものがなくて、結局スイッチを切ることとなった。

もしやこのテレビは、私を挑発でもしているのではなかろうか。なんにしたって、私に対して不親切すぎる。

私は苛立ちを抑えきれぬまま立ち上がり、とりあえず腹を満たそうとパンを漁る。今までは節約やら何やらのために、ひどく小食になっていた。だけれど、成金じみたデカブツがバックについた以上、

そんなしみったれた節約をする意味はない。
久々に口を大きく開き、パンの半分ほどを口に含んだ。表面に、うっすらとカビが生えていたのが目に入る。たいした問題ではないのだけれど、やはり多少は不愉快になる。
何もつけず、生のままで食パンを次々と食べていく。三枚、四枚といったところで、腹がいいかげんに苦しくなった。けれど、これを食べ終えてしまえばまたやる事もなくなってしまい、苛立ちが残るばかりになる。
私は無理矢理にパンを口に押し込んで、無理矢理に何とか喉を通した。時折突っかかりむせてしまうが、今は水道代とて節約はしない。
ああ、裕福とは素晴らしきかな。
パンを全て詰めてしまえば、とうとう真実やる事が無くなる。手が所在無く、だらり垂れる。パンの袋が、クシャリと音をたてて潰れた。
見るべき物も見当たらず、やるべき事などあるはずも無く、私はその場で途方にくれた。
途方に暮れて暇を弄べば、先程の映像が頭をかすめる。テレビの画面に映し出された、そこで寝ている生き物の顔。
あれはきっと、ニュースと呼ばれる類いの物で。そこに出演しているからには、こいつらが何か非凡な事に関わっているという事で。
その事について考えていると、ふいに、気持ち悪さが全身を巡る。乗り物酔いでもした気分だ、頭がふらくらと落ち着かない。これは、眠さのせいだなどでは無いだろう。ええい、慣れない事などするべきではない。おまけに、この生活に入ってからは、私はろくに脳みそを働かせてはいないのだ。
脳みそが悲鳴をあげる前に、さっさと考える事を放棄してしまえば良いのだろう。けれど、今はそうはしていたくない。
先程のニュースの、こいつらの。どうしてこいつらが出ていたのか、それを私は知らなければ。やっかい事に、知らず知らず巻き込まれるなどまっぴらごめんだ。

しかし、困ったことに情報源が何も無かった。新聞などは取っていない、パソコンだなど売ってしまった、雑誌だなんて買うはずも無い。

・・・隣の部屋の住人は、二、三日留守にすることもザラだ。勿論、その間新聞は放置されている。

無駄に重いドアを開き、そこの様子を伺った。郵便受けから飛び出ている、いくつもの紙の束。良かった、どうやら留守にしておいてくれていたようだ。今日の私は運が良い。

紙の束を全て纏めて引っこ抜いて、その場でちらりと一面を伺う。暗闇でろくに見えはせず、写真も誰が写っているのかまるで判別ができない。仕方が無い、部屋に戻って読むこととしよう。

何も、盗むというわけではない。ただ、ちょっと拝借するだけだ。有益な情報が無ければ、すぐに戻しておいてやろう。

辺りに誰もいないことを確認し、私は自らの部屋に戻った。顔もわからぬ隣人よ、今日はあなたに感謝しよう。

7．脳をうごかす（後書き）

春休み中とかいいつつ、相当遅くなってしまいました七話目です。高校生活は楽しいですが忙しいです・・・。今後も一ヶ月とかあいてしまったりするかもしれませんが、どうか見捨てず見ていてくださると幸いです。

8．見つからない

ばさばさと嵩張る、手の内の紙束が煩わしい。これが貴重な情報源で、そこそこに大切なものである事はわかっている。あまりぞんざいには扱わず、扱えず、だからこそ余計に煩わしい。

何故、これほどまでに大きいのか。読みにくい事この上無い。いらない記事などいくらでもありそうなのだから、もっと小さくすれば良いのに。乱暴に床に投げおいて、小腹を満たそうとパンを漁る。メロンパン、クリームパン、揚げドーナツ、砂糖だらけの甘ったるいパン。

生き物どもが、勝手に買って来たのだろう。やけに賑やかな形相の袋が私を迎えた。ひどく甘そうで飾りに凝った菓子パンばかりで、私の好みとは程遠い。小さい生き物の趣味だろうか。そうだとしたらかわいらしいが、大きい方の趣味だとしたら、それはなかなか気味が悪い。

適当に、手元のパンを頬ばった。じんわりと広がる、行き過ぎた甘み。まずく嫌いだと感じたけれど、私はそれをもう一度噛んだ。

床に座り、屈んで新聞を凝視する。

手元が暗く、文字は読めない。仕方が無いので写真だの絵だのを追い求め、バラバラと乱雑にめくっていく。大きな生き物の写真、もしくは小さな生き物のか。どちらか一つでもありはしないか。

最後までめくり終えたところで、それはどちらも見当たらなかった。何だ、私に、わざわざ取らせていておきながら。とんだ期待外れだと一人嘆息をし、新聞を屑箱の方へと投げ飛ばした。役に立たなかったのだから、わざわざ返しに行かなかろうが構わないだろう。私の望みに、答えてくれはしなかったのだ。義理立てをする理由もない。

きちんと日が昇ったら、もう一度テレビをつけてみよう。それでやつらのニュースを探して、見当たらなければ睡眠をとろう。

どうせならば、全く見当たらないほうが。そのほうが、却って気持ちが良いかもしれない。
ほんの少しの情報だけでは、決して気分は晴れないだろう。私は、もやが溜まるなど嫌だ。全てを教えてくれるのなら、それに勝る事はないのだけれど。
随分と珍しいことに、眠気はやってこなかった。ただただそのまま座ったまま、長い時間が経過していく。
そして随分と久しいことに、退屈だと、そう感じた。ああ、嫌だ嫌だ。何が退屈なものか。素晴らしい事だ、こうしていられるのは、素晴らしい事だ。どうにか自分を言い聞かせようと言葉を駆使し、私は頭を幾度も叩いた。そのうちに、強く頭が痛んでしまって、私はそうする事をとうとう止めた。
けれど頭の痛みは晴れず、じんじんとしつこく残っている。耳鳴りが、鳴っていた。静かに響く耳の音は、ヘッドフォンから流れていた、雑多の音を全て殺して、私の中に、その部屋の中にこだましていた。
私は寝る気も無くしてしまって、音を聞く気も無くしてしまって、その場に座って、生き物達の寝顔を見た。安らかだった。すやすやと、寝息を立てて眠る姿は、それを形に表しでもしたかのようだ。小さな生き物の、小さい頭に掌を置いた。静かに、とても静かに、その手を私は、左右に小さく動かしていた。このまま、握り潰してやろうかと。頭の中を、そんな事が横切った。そうすれば、さして強くない私の力で、この子の脳は飛び散るだろう。想像ならば、いとも簡単に素早く出来た。何度も何度も、頭の中でイメージ映像は反復される。
私は、手にありったけり力をこめてみようとして、息を吸い込み、手に集中した。そして　何もしなかった。
もう一度、力をこめてみようとして、またしてもできず途中でやめた。腹だたしくて、いらだたしくて、大きな生き物のばかでかい背中を、力の限りに蹴飛ばしてやった。

びくりともせず、大きな生き物は寝息をたてる。気がつく様子はまるでない。それが妙に気に食わなくて、私は何度も背中を蹴った。

8．見つからない（後書き）

はい、６３日ぶりの更新でした…ｏｒｚいい加減執筆スピードどうにかしたい…。見捨てず読んでくださる皆様、本当ありがとうございます…！

9．不かいなもの

ドアのインターホンがなった、らしい。
この部屋のそれが鳴るだなどという事は、一体どれほどぶりの事だろう。たとえなっていたのだとしても、今までならば、私は気付いていなかったに違いない。
今は都合が良いのか悪いのか、私の部屋に居るのは私だけではない。可愛らしい小さな生き物と、おぞましい大きな生き物とが、私にインターホンが鳴ったことを知らせたのだ。
生き物達に一瞥をくれ、私は出るか出まいかを迷った。
こんな生活を始めてから、誰も此処を訪れなくなってから一体何日が過ぎただろう。今更（初期の頃でも、あまりかわらなかったけれど）この部屋を誰かが訪れるだなど、どう考えても面倒事だ。
今か今かと褒められたがっている小さな生き物を小さく蹴り飛ばして、大きな生き物に押し付けた。
私は居留守を決める事を決めたけれど、来訪者はしつこく居座ることを決めたようだ。音が聞こえなくても判るほどに力強くドアが叩かれ、その度に大きな生き物が醜くうろたえ、小さな生き物はわけもわからずはしゃいでいた。
ドアの振動は、次第に部屋全体を揺らめかせた。
ああ、振動がひどく気持ち悪い。嫌だ、さっさと出て行けばいいのに。ここは私の部屋なのに、何を勘違いしているのだ。
私は意地でも出てやるものかと心に決めて、床に置いた手を握り締めた。
今までのよりも、ずっと大きな揺れがやって来る。
私は思わずびくりと跳ねて、それが地震ではない事に失望する。
ひびき続けているそれに、私は体を縮込ませた。体育座りで、顔を埋め込み、出来る限りに小さくなって。
ただ、揺れただけであったのなら。私はこんな風にはならない。た

だ単純にただ短絡に、沸き上がるいらつきに身を任せてはあたっただろう。
それで、よかった。そうなる事が、私にはよかった。
そうだ、例えいくらか幼げであっても、例えいくぶん情けなくても、私はそうしていれば良いのだ。
だというのに、なんともおぞましい事があった。私は、瞬間に肌が粟立ち身を竦めた。
外からの、音だ。醜く低く響き渡る、私が望まない汚い雑音。
もはや何も感じなくなった、音ですらない雑音達の間に混ざって、私の体と同化していた、ヘッドフォンを押しのけて、有り得ない、音、が、あろうことか、私に聞こえてしまっていたのだ。
何を畏れ、おののいたのかはわからない。ただ、私の全身は全てでそれを否定していた。近寄るな。そこを動くな。この部屋から、消えろ。私から、立ち去れ。
気付けば私は、私のからだは、あろうことか。無様に惨めに、小さく小さく小刻みに、その体を、絶えず振動させていたのだ。
顔が熱い。赤い。きっと今、私の顔は火より炎より何より赤い。今のこの私に今のこの私が、必死で耐えているその赤で、私の顔は酷く染まっているのだろう。
ふいに、視界が暗くなった。
自らの目の前を覆う暗闇に、私はみっともなくも取り乱しては光りを求めた。
怖かった。
他の余計な言葉など要らない。私はただただ怖かったのだ。だから、私は喚いた。そして、いつからだろうか、泣き喚いた。
もう何も、考えることなどできなかった。わたしが喚く、泣き喚く声が、もう耳から聞こえてしまえる。近くからの大音量に、雑音は意味をなさなくなった。
ああ、ついに意味をなさなくなった。私の最後のだったものが。
私の喚きが、振動よりも遥かに大きくなった頃。慌てたように、戸

惑うように、ようやく暗闇は私からのけた。
私はそれに気がつくと、汚らしい、汚らわしい、そのぐしゃぐしゃであろう泣き顔を上げた。
私からその体を退けた、その大きな生きが、私を見て唖然としていた。
脂ぎった汗をながす、汚らしい大きな生き物。
そうであるはずの、そうでなければならないはずの、その大きな生き物に。私は、思い切り抱きついていた。
そして喚いた。続いて喚いた。あらんばかりの力を持って、大きな生き物の巨体を酷く締め付けた。
よってくる小さな生き物を投げ飛ばして当り散らして、私は子どものように喚いた。汚らしい上に醜い、大きな生き物にひっついて喚いた。

9．不かいなもの（後書き）

１７３日ぶりの更新・・・です。
しかも長らく何も書いていなかったので文体も何も変わっていますね・・・；
心の赴くままに書いてたらもうなんでしょうこの急展開。
今後も更新に間が開く可能性が大いにありますが、見捨てずお付き合いしてくださると嬉しいです。
ではでは。読んでくださりありがとうございました・・・！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3903d/

静かなひとへや

2010年10月12日01時00分発行